

る中人のかつぼうどりと云ふ即これ也かんどりてふも喚子鳥のよこなはり言也同じ鳥をさまざまに名づくるは常の事ぞ此鳥萬葉に多く出て何の疑もなきに後の世人は古今歌集の一つを守りてひがごといふめりこはいづこの山方にもあれど下つふさの國にては何とかや薬にすとてとれるを見しに凡は鳩にてかしらより尾かけてうす黒也はらは白きにいさか赤き氣有てすゞみ鷹のはらざまなるかた有くちばしは鳩のごとくして少しく長くうす黒し足はうす赤にてはとよりも高し

〔比古婆衣五〕喚子鳥

よぶこ鳥いかなる鳥なるにか詳ならず昔よりさまざまのさだ聞ゆれどそれ去からむともおもはれず然るに萬葉集に呼子鳥をよめる歌どものいづれもほとゝぎすと同じ趣にきこゆればもしくはいにしへ大和わたりにてほとゝぎすの一名なりけるが今京となりて後漸にそのものざねを去らずなりゆきてたゞ古歌にのみすがりてまねびよむ事となりこしを去かすがに去らずてはとさかしらにおしあてごととして世々にとりくの説どものいできたるにはあらざるかとおもひよりてありつるに此ころ字鏡集と云へる古き字訓の書を見て其證を得たり○下

〔萬葉集一〕太上天皇○持幸子吉野宮時高市連黑人作歌

倭爾者鳴而歎來良武呼兒鳥象乃中山呼曾越奈流

〔萬葉集八〕大伴坂上郎女歌一首

尋常聞者苦寸喚子鳥音奈都炊時庭成奴

右一首天平四年三月一日佐保宅作

〔萬葉集九〕幸芳野離宮時歌